
六月の竜

隅々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六月の竜

【Nコード】

N6371Z

【作者名】

隅々

【あらすじ】

ムーンライト様にて更新中の「六月のドラゴン」を対象年齢の引き下げをして更新します。

ストーリーは変わりません。

……生れつき目が見えない少女里枝は気が付いたら知らない場所にいる。助けてくれた親切な人には、鱗があつて、角があつて、牙があつて……ゆっくり進む異種間ラブファンタジー。

里枝は、生まれつき目が見えなかった。
慣れた今では、多少の不自由以外は問題ない。

つまり、たまには不便な時もある。
それは例えば今。

「…森？」

そう思ったのは香りと音、そして柔らかい素肌に触れる感触からだ。
った。

緑の香り、うるさいほどの鳥の囀り、土の感触。
それは、里枝が気がつく前に居た場所には到底あると思えない代物だ。

「どうしよう…」

里枝一人では、何も解決できない状況だ。

ここがどこかも、周りがどうなっているかもわからない。

とりあえず人を捜す為進んでみるという行為は、里枝には危険過ぎた。

「どうしよう…」

里枝は二度目の言葉を吐き出した。

里枝は溜め息をついた。

動くのは危険だけど、ここにずっといるのも同じくらい危険だからだ。

移動するにしても、棒か何かあればいいのだが、こんな場所では望めないだろう。

せいぜい木の枝くらいしかない。

とりあえずその木の枝が欲しくて周りに手を伸ばしたが。

「…っ！」

里枝は伸ばした手をさっと引っ込め、もう片方の手で庇うように抱き込んだ。

（今のは、なんだろう）

温かいそれは、まるで人の肌だった。

里枝はゴクリと唾を飲み込むと、勇気を出してもう一度じっくり触ることにした。

とにかく見えない分を他の感覚で補おうとした。

ゆっくりと触れていき、やはりそれが人の形をしていることがわかった。

指先と思われる場所から、どんどん上を触っていき、やがて腕の形を知る事ができた。

がっしりとした腕と肩、太い首、しっかり出た喉仏で男性だとわかる。触れる顔立ちは端正。

ただ不思議なのはその先だった。

額に、突起がある。

先にいくほど尖るそれは、角のようだ。

（角？ 角があるの？ この人…）

もっとじっくり触れようとした時だった。

「それ以上触るなら、――殺すぞ」

地の底から響くような声で威嚇されたのは。

三（前書き）

ここから注意書きがなければ数字のみのサブタイトルでは里枝視点となります。

三

驚いた。

起きているなんて思っていなかったから。

「ご、ごめんなさい。私触らないと分からないの」

気配で何となく分かることもあるけれど、正確なことは触ったりしないと分からない。

角の人は私の言葉に驚いているみたいだった。

横になっていた体を起こし、私を見つめている。

「…見えないのか」

「はい」

空気が動き、ふわりと何かが顔の前で止まった。

「…本当らしいな」

「はあ」

何をどうして「本当らしい」のかは解らないけれど、とにかく殺されないですむようだ。

何となく角の人の雰囲気も和らいだ気がする。

「人間の娘が、どうしてこんな場所にいる」

口調はきついけれど、声音は優しい。
先程とは変わって労るようにも聞こえる。

「分からないんです、気付いたらここにいました」

私もとにかく人に会えたことで安心していたから、角の人が言った
事の不自然さに気付かなかった。

「気付いたら…？」

角の人はそのまま黙ってしまった。

私はもう一度角に触りたくて仕方なかった。
だから、ついじっと見つめてしまっていたのかもしれない。

「……何だ？」

戸惑った声にはっとした。

…恥ずかしい。

「ごめんなさい！ ああ、角が、気になって…ごめんなさい」

顔から火がでそうで、謝罪は尻窄まりになってしまった。

角の人は黙っていたけれど、ふっと笑った気がした。

「ならば…気が済むまで、触れているがいい」

「わっ」

体を持ち上げられて、一瞬何が起こったのか解らなかった。
膝の上に抱き上げられたのだ。

腿の裏に感じる足は筋肉質で逞しくて、私はもっと恥ずかしくな
てしまった。

四

角の人は自分から、ゴルトハルト、と名乗った。

私もお返しに名乗ると、良い名だ、付けたのは親か、親はどんな人間か、と穏やかに尋ねられた。

私は応えながら、せっかくなので角を触らせて貰っている。

それにしても、良く出来た特殊メイクだと感心した。

まるで本当に生えているようだ。

「リエは迷子なのだな。気付いたらここにいたというのは不思議だが、親は近くにいるのだろう」

送ってやる、とゴルトハルトさんは私の頭を撫でながら言った。とてもありがたい申し出に私は断る理由などなかった。

「ありがとうございます」

なんて親切な人だろう。

気持ちも顔もほくほくする。

「竜族が弱き者を見捨てることなど有り得ない」

だから礼などいらない、とゴルトハルトさんは照れ臭そうに言った。……竜族、と聞こえたけれど冗談か何かだろうか。

普段から私は視力を聴力などで補っているから、聞き間違いというのはあまりない。

もしかすると、ゴルトハルトさんはコスプレをしているのかもしれない。

そしてその世界感そのまま私と話してくれているのかもしれない。なら、そのままでもいいだろう。

「太陽が昇りきるまでには森から出られる。……見えないのなら、空を飛ぶのは恐ろしいだろう？」

「空も飛べるんですか？」

「無論」

本当は少しだけ興味があつただけど、コスプレをしている人に飛んでみて下さいなんて言えるはずもなく。

「地上で、お願いします」

「承知した」

このような流れで、私はゴルトハルトさんに抱えられながら森の出口を目指すことになったのだった。

竜の一（前書き）

竜の、とつく時はゴルトハルト視点です

竜の一

「ゴルトハルト様」

村の入口で声をかけられた。門番役の男だった。

「何だ」

「どちらへ行かれます。本日はアオローラ姫がお待ちのはずでしょう」

「…まだ時間はある。散策してくるだけだ」

アオローラは大老の娘で、私の定められた許婚である。

今日はそのアオローラと会うようにと大老から命じられていたが、どうしても気分が乗らなかったのだ。

だから散策などと理由をつけて外に出て来てしまった。

東の竜族の村は崖下にあり、崖の上には誰も手を加えたことの森が広がっている。

その森の中、気に入りの場所に腰を下ろし、青空を眺めた。

感傷に浸りたいわけではなかったが、気分は鉛を溶かしたように重かった。

アオローラとは今までにも何度か顔を合わせた。彼女は確かに美しく聡明だが、自分の中の何かが「違う」と告げるのだ。

重さに耐えかねてごろりと仰向けになった時だった。

娘が私の隣に座っているのに気付いたのは。

(いつの間に)

突然そこに現れたのだ。

強靱な肉体と精神が自慢の竜族でも驚く。

「…森？」

その娘は確かにそう呟いた。まるで何故己がここにいるのか分からないかのように。

人間がこんな場所にいることなど滅多にないのだが、ともすれば妖精にも見ることができる体からは人間の匂いしかなかった。

背の中ほどまで真っ直ぐ降ろされた黒い髪からは、優しい花の香がした。

だからしばらく見つめていようと思ったのだ。

「どうしよう…」

と、不安げに呟いた時から違和感はあったのだ。
その違和感は間もなく解決することになる。

竜の二

「どうしよう…」

二度目のその言葉は娘の混乱状態を表現していた。

娘は、しばらくすると何かを手探りで求めるように動き始めた。ぎこちない動きだ。

とん、と娘の指先が私に触れた。

娘は跳び上がらんばかりに驚き、その手をもう片方の手で庇った。そしてまた確かめるように私に触り始めた。

柔らかい指と掌の肉に、つい私は好きなようにさせてしまった。普段ならば有り得ないことだ。

目も閉じていたからか、娘は私が眠っていると思ったらしい。

小さな指が私の角に触れた。

焦ったように軽く離れたそれに私は残念に思った。

やはりただの人間の娘か。

人間は、それはそれは竜族を怖れるからな。

私の額から伸びる角で私が竜族であることに気づいたのだろう。

もいい。

まだ触れようとする手を私は威嚇した。

「それ以上触るなら、——殺すぞ」

娘がもっと怖がるように、気持ちを込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6371z/>

六月の竜

2011年12月21日13時50分発行